

持続可能な社会の構築を目指して



実施担当者
京都教育大学附属京都小中学校
教諭 片山 和政
教諭 國原 信太郎
教諭 野ヶ山 康弘

1 はじめに

これからの社会は、新しい知識、情報、技術が、政治・経済・文化をはじめとするあらゆる領域における活動の基盤として飛躍的に重要性を増してきている。さらに、グローバル化が進展とともに、国際的な相互依存関係はますます深まり、我が国の関わり方も重要視されてきている。

このような状況の下で、地球環境問題、エネルギー問題、人口問題、難民問題など地球規模の問題が深刻化しつつあり、これらの問題の解決に当たっては、国際的な協調が不可欠となっているにも関わらず、世界的規模での競争激化が表面化し、種々の摩擦が生じる結果となっている。また、こうした国際関係の緊密化や複雑化などを背景にして、グローバル化はさらに進展し、今後ますます加速していくものと思われる。

このようにグローバル化が急速に進展する中で、絶えず国際社会に生きているという広い視野を持つとともに、我が国の立場やスタンスも重要であるが、各国が国を越えて相互に理解し合うことも、ますます重要な課題となりつつある。

昨年度の総合的な学習の時間では、エネルギー教育を大きな柱として、エネルギー自給率、エネルギー資源、再生可能エネルギー、原子力、福島復興、環境問題等、日本が抱えるエネルギー問題についての探究活動を行ってきた。

それらをふまえて、本年度は、世界をとりまくエネルギー問題や課題、さらには、それに付随する環境等に関するテーマをグループごとで考え、仲間とともに問題や課題解決の方法を探り、それらをポスターなどにまとめていった。日本だけでなく、諸外国のエネルギー事情やその問題、背景などを比較し、現代社会が抱えるエネルギー問題の本質を探究した。また、福島カレッジへの参加や、福島県磐城桜ヶ丘高等学校の生徒を本校に招いての交流会を企画し、実施した。

持続可能な社会の構築を目指して、日本を含めた世界が抱えるエネルギー問題に対して課題意識を持ち、ポスターセッションする形で探求を進め、表現力や説明力、探究活動の深まりを得ることができた。

2 ポスターセッション

持続可能な社会の構築を目指して、エネルギー自給率、エネルギー資源、再生可能エネルギー、原子力、福島の復興、環境問題等、昨年度は日本が抱えるエネルギー問題を考察したが、今年度は世界が抱えるエネルギー問題に目を向けて、考えを深めていくことができた。

本校における文化祭で、下級生にポスターセッションを行い、質問を受け、活発な意見交流の場とすることができた。



3 福島カレッジ

福島の震災復興を入り口として「持続可能な社会の構築」をテーマに、附属高校ではSSC（スーパーサイエンスクラブ）の中で「福島や京都の抱える課題」、「日本や世界が抱える課題」に取り組んでいる。また、本校では総合的な学習の時間の中で「エネルギー問題」について取り組んでいる。「福島学カレッジ」に参加する機会を得ることができた。これは、環境省主催の事業で、東日本大震災・原子力災害を経験した福島について研究を体験する実践型のプログラムである。

東京大学の開沼博先生のもと、生徒たちはグループごとでテーマ別に現地視察をしたり、福島県内の中高生たちと対話をしたり議論したりする中で、これまで学んできたことを改めて自分事として捉え直し、学びを深めることができた。



4 福島県磐城桜が丘高等学校の生徒を本校に招いての交流会

2年間の活動のまとめとして、これまで交流を続けてきた福島県立磐城桜が丘高等学校の生徒7名を京都教育大学附属京都小中学校へ招き、水力発電発祥の地の京都で「持続可能なエネルギー」をテーマに交流会を行った。

附属高校3年（本年度卒業）した生徒から、福島の震災復興を入り口として、中学から高校まで続けてきた活動について紹介があった。また、福島県立磐城桜が丘高校の生徒からは、福島第一原発などを視察したことについて紹介があった。

その後、「これからのエネルギー」をテーマに、小グループに分かれて議論を行い、お互いに考えを深めることができた。満開の桜で観光客が多く訪れて活気のある京都で対話活動が、福島の生徒たちにとって、故郷である福島県を新たな視点で見つめ直すきっかけになったようである。



5 まとめ

昨年に引き続き、外部の専門家による講義を通じて、確実な科学知識を習得してきた。各講師の先生のお話を通じて、生徒たちは、原子力発電のしくみ、放射線の性質、高レベル放射性廃棄物処理の問題、さらには、メディアやエネルギーの関係、環境とエネルギーまでを科学的に学ぶことができ、確かな科学的知識を習得するに至った。また、これらの学習を通して、その後行った探究活動では、エネルギー問題をはじめとした社会における問題を、自ら調べ、他者との交流の中で、問題解決の糸口を見つけ出し、探究活動を活発化させることができた。さらに、各自が深く考えていくことを獲得し、各自で問題意識をもち、現代社会が抱えるエネルギー問題について、自分事のようにできるような素地を積み上げ、今後のエネルギー問題をどのように解決していくのか、生徒たち自身で考える力をつけることができた。

また、この2年間のうちに、学内だけの学びだけで終わらせず、被災地の福島や青森県六ヶ所村、福井県の大飯原発の視察を通して、これまでに考えていたことをさらに進展させる探究活動を継続的に行うことができた。

2年間の活動のまとめでは、福島県立磐城桜が丘高校の生徒との交流では、被災地と遠く離れた京都の生徒が意見を交流し、それぞれが改めてエネルギー問題をはじめとする現代社会の課題を見つめ直すきっかけとすることができた。

謝 辞

本実践は、公益財団法人中谷医工計測技術振興財団の助成を受けて行われた。

以上